

イスラエルの自由と民主主義

白杵陽

- ①Baruch Kimmerling (2003) *Politicide: Ariel Sharon's War against the Palestinians*, London: Verso.
- ②Ilan Pappé (2003) *A History of Modern Palestine: One Land, Two People*, Cambridge University Press.
- ③Ephraim Nimni, ed. (2003) *The Challenge of Post-Zionism: Alternative to Israeli Fundamentalist Politics*, London: Zed Press.
- ④Laurence J. Silberstein (1999) *The Postzionism Debate: Knowledge and Power in Israeli Culture*, New York & London: Routledge.
- ⑤Israel Shahak & Norton Mezvinsky (1999) *Jewish Fundamentalism in Israel*, London: Pluto Press.

イスラエルは中東において唯一民主主義を謳歌している自由な国家だと自認している。自由な選挙制度に基づいて選挙が行われ、政権交代が頻繁に行われているという意味ではそれは正しい。また、イスラエル国民に対して宗教・思想・良心・表現・集会・結社などの自由が保障されているという意味でもそうである。つまり、イスラエルでは基本法に基づいて自由と民主主義は実現されているといえる。ただし、残念ながらそのような自由も民主主義も条件つきである。それはユダヤ系イスラエル国民に対して自由と民主主義が完全に保障されているというにすぎないからである。イスラエルにおける自由と民主主義を考える場合はこのあたりが最大の争点になる。つまり、イスラエル国家は同時にユダヤ人国家であることと民主国家であることができるのかという政治課題をめぐる論争であるといってもいい。換言すれば、イスラエルに民族的なマイノリティとして存在するアラブ系市民あるいはイスラエル国籍をもつパレスチナ人をイスラエルの民主主義のシステムでどのように位置づけるかという問題でもある。つまり、「ユダヤ人国家」においてイスラエルの市民権をもつユダヤ人とパレスチナ人のあいだに真の平等はあるかという核心的な問いにつながるのである。

以上の観点から、あえて私自身の偏向を前面に押し出して問題作を中心に取り上げる。狭義の民主主義だけで

はなく、民主主義を支えるイスラエル政治文化にも目配りして、できるだけ最近出版された新しい本をあげてみたい。その意味ではここにあげている本はほとんどが伝統的なシオニストにとって受け入れがたい議論を展開している。すなわちポスト・シオニズム論争に関係するユダヤ系の出自をもつ著者の著作をあえて選択したのである。おそらく、伝統的シオニストからは、このようなユダヤ人はイスラエル在住であれ、そうでない場合も、マルクス以来の「自己憎悪ユダヤ人 (self-hated Jews)」のカテゴリに入れられて、事実上棚上げされてしまうのかもしれない。しかし、このような「異端」をも許すのもイスラエルという民主国家であり、この点を改めて考えることで、イスラエルのなかの「ユダヤ的知性」の可能性について考えてみる必要があると思う。

なお、著作の順番は出版が新しいものから並べた。

①の著者はエルサレム・ヘブライ大学政治学教授で、イスラエルの「ハト派」の論客。本書もシャロンへの対パレスチナ政策を徹底的に批判したもの。書名となっている「ポリテイサイド」は辞書的な定義にしたがえば「政治的自殺」で、例えば中東和平などで「妥協案を受け入れることによって政治力を失うこと」の意味で使われたりする。キンマリング教授は、「ポリテイサイド」をパレスチナ/イスラエルの文脈において「正当な社会的、政治的、経済的な実体としてのパレスチナ人の存在を壊

●ガイド・リーディング

滅することを究極的な目的としてもつプロセス」と定義したうえで、エレット・イスラエルと呼ばれる領域からパレスチナ人を部分的あるいは完全なエスニック・クレンジングを含んでいるだけではなく、このやり方は必然的にイスラエル社会の内部組織をも腐らせ、中東におけるユダヤ人国家イスラエルが依拠するモラルをもその根底から切り崩すことになる」と警告する。すなわち、シャロンのやり方の帰結は二重の「ポリテイサイド」を生み出す。すなわち、パレスチナ人の存在に対して、そして長期的にはユダヤ人の存在に対して、二重の「ポリテイサイド」となるというのである。したがって、シャロン政権は中東地域のすべての民族の安定と存続にとって危険なものになるとまで言うのである。民主国家を自認するイスラエルの自殺行為への内部からの警鐘として読むべきであろう。

②はポスト・シオニズムあるいは「新しい歴史学」の最左派の論客としてあまりにも著名なハイファ大学の現代史研究者イラン・パペによる最新著である。タイトルに示されているように、パペは確信犯だ。イスラエル現代史はパレスチナ現代史に限りなく近づくべきだということまでの主張に基づき書き下ろした。民族主体としてのパレスチナ人に注目することがイスラエルの民主主義に対してもっとも痛烈な批判になることを熟知している人物だ。それだけにパペのイスラエルのアカデミズムで

の孤立はいっそう深まることになるだろう。しかし、このような人物が描くパレスチナ現代史を通してイスラエル現代史における民主主義、自由、そして平等の諸理念のありようが逆照射されてくることもたしかだ。

③はタイトルが示すとおり、最新版のポスト・シオニズムに関する論文集である。出版社はかつての「第三世界」派を代表し、マルクス主義者を含む左派の批判的知識人たちの著作を数多く出版してきた実績がある。本書の執筆陣の特徴はユダヤ人のみならず、パレスチナ人も加わっていることであり、さらに女性研究者がジェンダーという視点を前面に打ち出していることである。執筆者には上記のイラン・パベをはじめ、社会学者ウリ・ラム（ネゲヴ・ベングリオン大学）、パレスチナ人の政治学者アスアド・ガニーム（ハイファ大学）、女性政治学者ハンナ・ヘルツォーグ（テルアヴィヴ大学）などが含まれている。また、エドワード・サイードが『アル・アハラーム』インターネット英語版に投稿したポスト・シオニズムに関する論文も収録されている。

④はタイトルが示しているように、ポスト・シオニズム論争の構図をマッピングしたものであり、同論争を概観するにはたいへん便利である。同時にイスラエルにおけるポスト・モダンあるいはポスト・コロニアル的潮流を含む現代イスラエル精神史の一端をも垣間見ることができる。副題が示しているように、フーコーが展開した

ディスクール論が基調になっている。ポスト・シオニズム論争がユダヤ系の研究者のサークル内で消費されてしまわないように、アントーン・シャツマースとエミール・ハビービーという二人のイスラエルのパレスチナ人知識人を取り上げ、論争自体の生産的な発展に寄与しようとしている。その意味で、ポスト・シオニズム論争の将来を語ることはイスラエルの自由と民主主義の可能性を語ることになることを感じさせる。

⑤のイスラエル・シャハクはイスラエルの代表的人権擁護の論客であった。惜しくも二〇〇一年七月二日に亡くなった。本職はエルサレム・ヘブライ大学の化学教授であった。本書執筆のきっかけはラビン首相暗殺であった。ユダヤ教ファンダメンタリズムはアラブ市民を二級市民として位置づけて排斥しようとするがゆえに民主主義の理念に敵対するという認識のもとに、ウルトラ・オーソドックス（ハレディーム）、宗教シオニズム、グーシュ・エムニーム、そしてメーイル・カハネの弟子であるバルーフ・ゴールドシュタインなどの系譜を批判的に検討する。究極的には、政治化したユダヤ教と政治制度としての民主主義が相容れないことの論証を目指している。その意味では、宗教と民主主義の関係を根本的に問うこととなる。

（うすきあきら／地域研究企画交流センター）

●リーディング・ガイド